



笑い合うことから始まる、「共生」の作り手

光島 宏美さん K&S 代表／奥大山自然塾インストラクター
Hiromi Koushima

日本一人口の少ない鳥取県の中でも、県下最少規模の江府町。
光島宏美さんは、この小さな町を縦横無尽に駆け回りながら
自然との共生、多文化共生の暮らしを実践している。

「色々やりすぎていて、何屋か説明するのが難しい」と自ら語る通り、光島さんの活動は多岐にわたる。個人事業主として町から様々な業務を任される一方、育ち盛りの子どもたちの母親として、地域や自然に根ざした子育てを実践中だ。江府町を舞台に、職業や立場といった既成の枠組みを軽やかに飛び越えて生きるその原点は、間違いなくJICA海外協力隊（JOCV）として過ごしたマレーシアのジャングルにあった。

光島さんの現在地 日常に溶け込む「共生」

光島さんは2021年、総務省の制度である「地域プロジェクトマネージャー」として江府町役場に着任。町が立ち上げた環境教育プログラム「奥大山自然

塾（自然塾）」で、SDGsに関わるマネジメントやインストラクター業務を担当した。

3年間の任期を経て独立。2024年4月からは自然塾での業務を継続しつつ、パラレルワーカーとして複数の仕事をこなしている。「自分の力を最大限に活用して、この町に足りないもの、あったら面白いものを形にしている」と、町に眠る可能性を次々と仕事という価値に変換し続ける光島さん。そこには、移住者にありがちな「よそ者の視点」では言い尽くせない、圧倒的な人間力が漂う。その根底にあるのが「共生」にまつわる二つの原体験だ。

まず一つは、自然との共生。JOCV時代の光島さんは、作業療法士としてマレーシア・サバ州の農村を巡回しながら活動した。「ジャングルの中を転々

としていました」と振り返る通り、その2年間は熱帯雨林という大自然との共生の日々でもあった。「火を起こし、川で泳ぐ。自然との暮らしは人を強くし、自分らしく生きる力になる」と、身をもって学んだ共生のあり方は、現在の自然塾における「五感を使って生き方を学ぶ」という活動の大きな指針となっている。

もう一つは、多文化共生だ。JOCV時代に出会ったマレーシア人と結婚した



マレーシアで一緒に仕事をしていた仲間たちと



マレーシアでの活動「みんなで楽しんで学ぶ」



光島ファミリー。夫マックスさんと子どもたちと



雪の森でスノーシューインバウンドツアー

光島さん。夫婦で意見が割れる時は、決まって「育った文化が違うのだから仕方ないよね!」と笑って受け流すという。分かりあうことを求める以前に「そもそも違う」という前提に立つのが、食卓を囲む日常の中に異文化が存在する光島家のスタイル。この姿勢こそが、境界を意識しない軽やかなフットワークへと繋がっている。

JOCV時代

専門家である前に友だちになる

光島さんは、幼い頃から「世界中に友だちをつくりたい」という夢を抱いてきた。日本を出るために「自分にしかできないことを身につけたい」と、作業療法士の資格を取得。国内で7年間の経験を積んだ後、JOCVに応募した。

派遣先では「できるだけ何もないとこへ行きたい」と自ら望み、拠点を決めず転々とする巡回型の活動スタイルを選んだ。しかし、現地で待ち受けていたのは、友だちをつくるどころか言葉さえ通じない現実。「みんなが大笑いしているのに、自分だけ意味が分からない。同じタイミングで笑いたいと思った」この悔しさが契機となり、持ち前のバイタリティーで体当たりで人々の輪に飛び込んで行った。

こうして、言葉を交わし笑い合うことが信頼関係への近道であることを知った光島さん。作業療法士としての活動でも、「自分が去っても、現地の人同士が助け合えるネットワークがあればいい」と、一箇所に留まり技術を教えることと

上に、人と人を繋ぐことに奔走した。必要なものが揃わず、教科書通りのやり方が通用しないジャングルでの活動。そこで育まれたのは「誰かと繋がってれば、なんとかなる」という揺るぎない精神力と、「全ては繋がっているのだから、必要なら何でもやる」というタフな行動力だった。

未来へのビジョン

親として、人として生きる

「これからも、肩書きは何だっていい。私を頼ってくれば面白いことが起きる、困った時に助けてくれる、そんな存在でいたい」光島さんにとっては「何屋か説明できない」という自由さこそが、最大の武器なのかもしれない。

「うちの子にはこの町を好きでいてほ

光島 宏美さん プロフィール

岡山県出身。マレーシアの作業療法士の隊員として「地域に根ざしたリハビリテーション(CBR)」に従事。2021年に家族と共に鳥取県江府町へ移住。江府町地域プロジェクトマネージャーを経て起業し、「奥大山自然塾」の運営やSDGs事業を担う傍ら、作業療法士、多文化共生支援やイベントMC、執筆など多角的に活動中。

しいけど、縛るつもりはない。どこでも生きていけるという選択肢を持てる子に育ててほしい」深い愛情をもって子育てに励む光島さんだが、母親という肩書きさえ一つの役割に過ぎないという。「そのための土壌を、地域を耕す一人として作っておきたい」光島さんの軽やかな足取りは、後に続く人々を照らす確かな道標となって行くだろう。



外国人介護研修生生活支援の様子「地域に定着するには地域を楽しむ」